

今回は少しテーマを外れてしまうことを先にお断りしたい。世界中が新型コロナウイルスで大きな影響を受ける中、フランスにもパンデミックの波が襲ってきた。

保健衛生上の非常事態宣言が3月23日に発令、7月10日まで続くことになっている。そして、一般にフランス語で閉じ込めることを意味するコンフィンヌモン Confinement と呼ばれる罰則付き外出規制は3月17日に開始、5月11日まで継続された。「ラクロワ」紙(5月7、8日号)のある記号学者の寄稿によると、このコンフィンヌモンという単語の使用は限定的になっていただけに、事態の重大性を感じさせるインパクトをもち、そして、閉じ込め解除を意味するデコンフィンヌモン déconfinement は、いま現在その意味を見出そうとしている最中だという。ちなみにこのデコンフィンヌモンという単語は、拙宅にあるすべての辞書に記載がない。簡単に理解できる言葉だが、今回の新型コロナウイルス騒動によって生まれた造語なのかもしれない。

外出規制が始まって1週間がたった3月26日、16歳の高校生が急死。フランスでも若者には大きな影響がないとされていただけに、衝撃は大きかった。5月8日には9歳の少年が川崎病に似た症状で死亡。幼い子を持つ親の不安を掻き立てることになった。また、専門家の間でもヒドロキシクロロキンの効能をめぐる軋轢が生じ、肯定派のマルセイユのラウルト医師を中心に論争が連日のように報じられている。そんな中でも、夏のバカンスに出かけられるのかどうかにフランス人の大きな関心が寄せられる点には国民性を感じる。

政府の規制解除には段階が設けられ、フェーズ1が5月11日から6月2日、フェーズ2が6月22日まで、その後フェーズ3に入る。それぞれの時期と地方に合わせて、諸活動の再開が細かく規定される。アルザス地方とパリ周辺のイルドフランス地方で大きな感染拡大がみられたが、筆者の住む中部リヨンの方は中程度であった。北東部で厳しく南西部でゆるやかと、フランスが二分された形になった。

外出規制が実施されると、教会やモスクをはじめとする宗教施設での会合も禁止された。宗教儀礼が禁止されていた時期、日曜日の10時半から12時まで放送されているミサ「主の日 Jour du seigneur」は記録的な視聴率をたたき出した。3月22日は通常の3倍ほどの170万人が視聴し、イースターやクリスマスを超える高視聴率であったという。

5月11日の規制解除に向け、司教区の多くは対面するのを避けたいとしていたが、意外なことに最も危険な地域の一つであったアルザス地方では、できる限り対人の接触を取り戻したいと考えているようであった(「ラクロワ」紙5月11日号)。5月17日には、危険信号の赤に色分けされたシャロン・アン・シャンパーニュという町で、ドライブインミサが行われた。展示会場の駐車場を利用し、車の中から参列、神父たちは距離をとって着席。ハザードランプのついた車だけに聖体拝領を行った。およそ500人の信者が参列したという。

当初は6月2日までは集会できないとされていたが、結局のところ5月22日に宗教儀礼の許可が下り、ソーシャルディ

スタンス、マスクの着用、消毒、人の流れの管理などの対策がとられた。曜日ごとに使用する座席を固定してミサを行った教会もある。

イスラム教徒はラマダンの断食の時期が重なったが、それらも同居家族のみで行う形になり、フランスイスラム評議会も集団での祈りを禁じた。さらに、政府の宗教儀礼の許可が下りた後も6月3日まで儀礼の自粛を呼びかけていたが、フェーズ2に入っても6月22日までは衛生上の安全を保障できない限りは祈りの集いを自粛するように呼びかけ続けている。

ライシテとの関連でいえば、3月25日受胎告知の日にフランス中の教会が医療従事者と犠牲者に捧げる鐘を鳴らした。それに呼応してリヨンなどの都市でモスクのミナレットからムアジンの声がスピーカーを通して街に響いた。これに極右のマリーヌ・ルペンらがライシテの原則に相応しくないと反応、極右活動家らもここはヨーロッパだと強く反発した。しかし社会的には大きな問題にはならなかった。

各種報道で見ると、信者たちは遠隔でつながれることを肯定しながらも、信仰はやはり向かいあって語り、助け合い、共有することに意義を見出そうとする点は変わっていないように思う。ゆえにミサが解禁になったとき、テレビやニュースで大きく報じられたのだろう。とはいえ信仰生活にパラダイムシフトがおこらないと言い切れるだろうか。マスク着用や手洗い、換気などは、フランスで十分に行われていたとは言いがたい。だが今は確実に変わってきている。生活様式の変化がこのまま続くのであれば、信仰形態も恒常的に変更する必要がでるかもしれない。その時、歴史に応じて糊塗してきた形式的伝統から脱却し、「コロナ後」に相応しく外面(形式)と内面(精神性)を刷新することに成功したものだけが生き延びるという可能性はないだろうか。これは新しいことではない。おそらく世紀の大事件のたびに繰り返されてきた作業なのだろう。今回の新型コロナウイルス騒動も、その歴史的大事件の一つとなるのではないか。生き残ってきた大宗教はそれらを乗り越えてきた実績がある。実績の少ない若い宗教に課された課題は大きいと言えよう。

[参照インターネットサイト](すべて2020年6月10日アクセス)

<http://www.leparisien.fr/societe/19h30-les-cloches-des-eglises-ont-sonne-en-hommage-aux-soignants-25-03-2020-8288037.php>(教会の鐘について)

<https://www.lefigaro.fr/actualite-france/messe-en-drive-in-achalons-en-champagne-pour-la-confession-allumez-vos-feux-de-detresse-20200517> (ドライブインミサについて)

<https://www.leprogres.fr/sante/2020/05/15/coronavirus-125-enfants-francais-atteints-d-un-syndrome-proche-de-la-maladie-de-kawasaki> (川崎病について)

www.bfmtv.com (ミサのテレビ視聴率、ミサの再開、マリーヌ・ルペンの反応について)

フランスイスラム評議会公式サイト <https://www.cfcf-officiel.fr/>